小児看護 10 月号　第 44 巻第 11 号（通巻第 562 号）　2021 年 10 月 15 日発行（毎月 1 回 15 日発行）
ISSN 0386-6289

小児看護 10

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

Vol.44 No.11 OCTOBER
2021

移植医療でしか治療選択のない子どもと家族へのケア

「つなぐ」医療で「いのち」を支えるために

連載

児童養護施設の看護実践

慢性疾患をもつ児童へのかかわり

へるす出版

連載

心が歌えば、世界が揺れる

佐藤聡美 Sato Satomi
聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第6回 新しい世界への切符

今でも，シャーロック・ホームズの本を読んだときの感動は忘れられない。子どもながら，ホームズの細かな観察力と卓越した推理力に魅了されたものである。

わが子はようやく小学校に入学したぐらいで，まだホームズを知らない。登校班のない学区のため，「一人で学校に行くのはこわい。道がわからない」と言うので付いていくことにした。4月にほとんどが親子連れで登校してきても，玄関で別れているのに，わが子は「ロッカーまで付いてきてほしい」という。好奇心を持っている私は，仕方ないなあ，という表情を一応は見せながら，付き添いを理由に教室まで付いていった。

子どもがロッカーでランドセルを開け，教科書を取り出した。「教科書を机の中に入れてくるから待っていて」というので，ロッカーの前でしゃがんでいると，小さな女の子が「これはどこ？」と袋を見せて聞いてくる。黄色い帽子を手に持った男の子が来て，またもや私に「これはどこ？」と聞いてくる。そのうちに子どもたちが私の周りにどんどん集まってきた。しゃがんでいる私は，1年生と同じ目線の高さになり，同胞のような不思議な感覚に陥った。しかし，どうやら子どもたちは私のスウェット姿を小学校の先生と推測して，勘違いしているらしい。

肝心のわが子は，ちゃっかりランドセルを片づけて着席してしまった。「僕のお母さんだよ」などとは一言も言ってくれない。どうしたものか戸惑っていると，6年生の男の子が1年生に近づいてきて「黄色い帽子はランドセルの中です」と教えてくれた。1年生の教室に2人ずつ，6年生が待機をして1年生を世話してくれているのである。私は「へえー」と感心した。

窮地を助けてくれた6年生に軽く会釈をして立ち上がると，今度は，ガリバーの大男になった気分である。わが子に向かって「お母さん，帰るよ」と小声で言うと，息子は一瞥だけしてバイバイである。もう母親に用はないのだ。

黒板には「ランドセルから連絡帳を出してください」と書かれていた。まだ文字が読めない子どもたちは，周りを見渡して，見様見まねで先生に連絡帳を持っていく。観察と推理によるサバイバル教室のようだ。

思えば病院に入院するときも同様である。病棟での過ごしかたも，言葉だけの説明では尽くせない。周りを観察して，こうするのかな，と子どもも親も推論して，毎日の生活に慣れていく。世界は自分より先にできているからである。退院するときも，進学するときも，就職するときも，いつも観察力と推理力の切符が必要になる。「考える力」の検査が子どもの推理力を測るのも，つまるところ，この切符を持っているかどうかを確認しているのだ。

佐藤聡美
さとう・さとみ
聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士，心理学者。臨床心理士，公認心理師。富山県高岡市出身。米国の Bellevue Community College を卒業後，お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究を行う。小児がんの子どもと家族を支えるエゴノキクラブを主宰する。お茶の水女子大学特任講師を経て，現職。

©へるす出版